

日本結核病学会北陸支部学会

—— 第84回総会演説抄録 ——

平成26年5月31日・6月1日 於 金沢医科大学病院新館12階（石川県内灘町）

（ 第73回日本呼吸器学会
第58回日本呼吸器内視鏡学会 と合同開催
第43回日本サルコイドーシス学会 ）

集会長 長 内 和 弘（金沢医科大学呼吸器内科）

—— 一 般 演 題 ——

1. 金属粉塵曝露歴を有し肺結核類似の画像所見を呈した急性間質性肺炎の1例 °大場泰良（NHO富山病呼吸器外）神原健太・徳井宏太郎（同内）

症例：53歳男性。主訴：呼吸困難。職歴：20歳～銅・亜鉛等の金属裁断業に従事，金属ヒューム吸入歴無し。住居歴：自宅から150mの距離に鶏飼育場あり，ペット飼育歴無し。2年前に来富し新築アパート在住。現病歴：平成24年1月初旬より咳，呼吸困難出現。2月12日近医受診，右肺炎と診断され抗生剤内服投与を受けるも改善せず。肺結核疑いにて同21日当院紹介入院。入院時現症：血圧130/90，SpO₂ 95%（room air），胸部X-P rⅢ3 rPl。検査所見：痰中抗酸菌陰性，normal flora，QFT陰性，プロカルシトニン陽性，KL-6正常域，CH50，C3，C4：軽度上昇，RAPA×80，ANA×40，CRP 21.81，右胸水分析L/N=60/40，ADA 30.9。リバルタ反応陰性，RAST陰性。入院後経過：SBT/AMPC，LVFX，TAZ/PIPCを逐次投与するも呼吸状態悪化。3月19日診断的治療目的でHRE投与開始。同21日，右肺陰影改善なるも，左肺新陰影出現。同22日，呼吸状態悪化。HRE投与中止。間質性肺炎の診断でsteroid pulse療法3日間追加。同28日prednisolone 40 mg/日内服に移行，以後5 mg/週で減量。陰影消失し4月13日退院外来投薬に移行。5月9日GOT 294，GPT 761，肝障害判明しHRE中止。6月6日steroid投与終了し肺結核転症扱いに移行した。以後の経過観察で，転症後6カ月，1年，1年9カ月目で右肺胸膜直下の再燃を認めるも，現在まで緩快を維持している。初発が片側肺で対側に浸潤陰影が移動，steroidに劇的に反応し投与終了後も胸膜直下に残存陰影を認めることより，器質性肺炎と診断した。BF病理検査未施行。考案：慢性金属粉塵曝露が肺線維化を伴うびまん性間質性肺疾患のほか，器質性肺炎の誘因になる可能性があり，肺結核

との鑑別に留意する必要あり。

2. 右肺全摘術を施行した肺非結核性抗酸菌症（*M. avium*）の1例 °松本かおる・芦澤信之・河合曆美・鳴河宗聡・山本善裕（富山大附属病感染症）峠 正義・仙田一貫・土岐善紀・芳村直樹（同第一外）早稲田優子・笠原寿郎（金沢大附属病呼吸器内）

症例は61歳女性。関節リウマチにて20年以上ステロイド内服中。20XX-5年より肺非結核性抗酸菌症（*M. avium*）に対して化学療法を開始した。その後，治療薬は副作用や臨床効果を理由に変更されながら加療されていた。しかし，空洞病変が増悪し，内科的治療のみでは病勢コントロールが困難と判断し，20XX年3月に右肺全摘術を施行した。術後合併症なく，左残存肺のNTM病変に悪化認めず，化学療法継続中である。

3. CAM，LVFX，SM併用療法が有効であった *Mycobacterium kyorinense* 肺感染症の1例 °中屋順哉・堺 隆大・高崎俊和・山口 航・小嶋 徹（福井県立病呼吸器内）高瀬恵一郎（福井県こども療育センター）

症例は73歳女性。肺非結核性抗酸菌症の疑いにて経過観察されていたが，両側上葉の陰影の増強が認められた。喀痰培養検体より *M. kyorinense* と同定され，過去の報告例，感受性検査結果からCAM，LVFX，SMで治療を行った。6カ月間治療を継続し自覚症状，画像検査とも改善が得られた。*M. kyorinense* による肺感染症は適切な抗菌薬加療を行うことで増悪を抑制できる可能性がある。

4. 肺MAC症治療例でのMAC抗体価と臨床像の関連 °桑原克弘・木村夕香・清水 崇・松本尚也・宮尾浩美・斎藤泰晴・大平徹郎（NHO西新潟中央病呼吸器）

肺MAC症治療がMAC抗体価に与える影響を調べるために既治療例49例の臨床像と抗体価の関連を検討した。

既治療例の陽性率は71.4%と低く、抗体陰性群の排菌例は21%、陽性群は57%と陰性群では排菌が少なく、結節気管支拡張（NB）型に限るとさらに陰性群の排菌は減少した。NB型ではMAC抗体は治療により変動すると推測され、ワンポイントの測定であっても病勢評価の参考になる可能性が高い。

5. 胃癌術後経過観察中に発見された結核性鎖骨上窩リンパ節炎の1例 °佐藤隆明・田島俊児・太田 毅・細井 牧・寺田正樹（済生会新潟第二病呼吸器内）武者伸行（同外）西倉 健・石原法子（同病理診断）長

谷川秀浩・五十嵐俊彦（厚生連長岡中央総合病病理）
症例は86歳女性。胃癌術後経過観察中に右鎖骨上窩リンパ節が触知された。外切開生検による組織診断は、乾酪壊死を伴う類上皮細胞からなる肉芽腫であり、Langhans巨細胞を認めた。ホルマリン固定標本からのPCRで結核菌群と同定され結核性リンパ節炎と診断した。胃癌による胃切除は結核の罹患リスクを増加させると報告されており、治療経過観察中は再発のほかに、結核も念頭に置く必要がある。